

ル 4
4169
特

一 振夷地圖記

同村場附



特

門 凡 4
號 4169
卷

道之記

早稲大學
第 29.3.30
藏書

享和元年四月廿二日の辰の刻に若館と云ふて海

とひてを里斗しりて龜田村と云ふて至りしは去年

某君の上座ありしは佐世の島にありしは

しりて船着ありしは今の島にありしは

尚下は農家少く漁場ののこされは

此の儀は後らあるとの割れも世にありしは

やとひて海をこるれは事と云ふに

村にありていしりてありて大船村と云ふに

此の日の卯半刻に大船と云ふて一泊り村と云ふに

年号
神武天皇御代
此の儀は後らあるとの割れも世にありしは

いふ橋のたもとにふしを渡りてをくくくくくくくくく
やそこたの方連なる山のらくくくくくくくくくくく
あの中を混わりぬる中ふ較の終わりて眺望もてあはれ
かへりて又混上俗をと大混中混とくくくくくくくく
芽の終つてくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
小舟ぬオシウナイと云ふくくくくくくくくくくく
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

川の川橋のたもとにふしを渡りてをくくくくくくく

廿四日 廿六日と見ゆくくくくくくくくくくく

廿六日 卯ま別 卯くくくくくくくくくくくくくく
七里余の渡海くくくくくくくくくくくくくくくく
わりくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

廿八日 辰別 巳津野家の舟に常磐岩ある舟は津野家
勤者行末某くくくくくくくくくくくくくくくく
夫が船夫くくくくくくくくくくくくくくくくくく
舟ののりりりりりりりりりりりりりりりりりり

建つれを勤くくくくくくくくくくくくくくくく

この前々もれり

提

一 形まつてきさうふのかわ人をきさうふの罪重

つて

一人とらるとのい皆死罪とらへ

一人ふ底はけ又い置らるゝのいも極く懲りて智ある人

寛政十一年四月

けおつるを極もつねと申さければ死もふとぬらる

廿九日辰刻前エドモと申してワシバツもむの世とてい言ふ余も極

きつて形つて山をきさうふり是よりたふ海たふ山と

えつてホロベツとていさありぬ

五月廿日卯刻前毎刻と申してラシボツケとておの坂を申りて

んねとて申す方の世とてい海山つて二月ふん後とれと

いさといと面白く藍路村とて後とて極くの形とる差

つりてとねと波のサウけとらとていさういさういさういさうい

をとり七里申してシラカイの定め二日をいさういさう

二日シヤタイ少島居をいさういさういさういさういさうい

ぬあといさういさういさういさういさういさういさうい

極業

突如あり

カフイハ焼ルイハホリハ山イ
ヤケのまじりあり

少分の程を削りて

此来の有りつりてしき波のありやとてたてしき
 まさたの早く夜露希粒あわれも色候ゆるぬや五
 月とらふまじく吹出んまきとてたてしき
 らねぬ秘なく常衣津よえぬ望月河西大目も基も露
 四日辰列と少女たまりてユウフツ川を渡る九十九余りて
 浅き川より二里す汁一と湖あおる色九二里一りて一甲
 央とさうて又一里す汁一とてビ、とてあまの二里家りてシコ
 ツの程と里送りて此あま川内り候くして千プロ(横木
 かごし
千プロハ撒夫舟名中、或人四舟と長き舟中ノホサナリテ
 為流るる舟中の板を舟本ノ皮ヲ以結付たり 是より
 林中とありゆき里一してたて眼の及限日素の花盛るる
 まる小乃くまもさうりてかごしとてまもロウサとてまのま
 形あま某と一りんをさうりしてまゆ一とたれはまきぶた
 して申列とウツ口舟と余
此舟ハ中流人舟長成らゆつと馬ヤクリ
 丸に棹を差人三人あまを人懸テ七人
 舟一とてマニシロツ川をりる早さるゆきの
 小してオサツトウの島の周廻凡昔まゆとありて
湖沼ナドイテ
 夫人唱テトウ云
本邦ニテモ池沼ノイテ堤トモハ
 先モ初ミノイニテ塘ナルヘシ ロウサンびり二里余りてイヒブとてあま
 ありた島のまじりあれいとさうりてあまをさうりて

うらみあふ人等とらるといふことにて母とあせらんれい思
て石物より運せしとせり積むるズリイ船是れおち揚りて

夜を明しぬ明日は瑞午の節なるふかき雨やめし初ぬきとて旅
のあひる

あひるは旅夫の積れ五日やちりやちりあぬうとぬきんい

舟積の明るをまらして船をりしとちた林木のこも地

のうらみ川に流れてあき妻家より凡廿六里計よりて石

物とらぬのせよハねおの運る金をおねおあき人たのかを

少金束のりありて杖のし時分中ちあきより幅渡を

て旅いをりしと揚りて川中七八千のるあはれくしと

千石船より入つ船しはあきと某と風物しとより

六日七日八日九日十日十一日とやりぬきとて風は

船と日のつれくしとせしおとほきとひぬ

また月ハかりかりしと吹入ておしんまきとて川の溪

まて旅者のまきとホしと

またれハ川月流しと夏の者

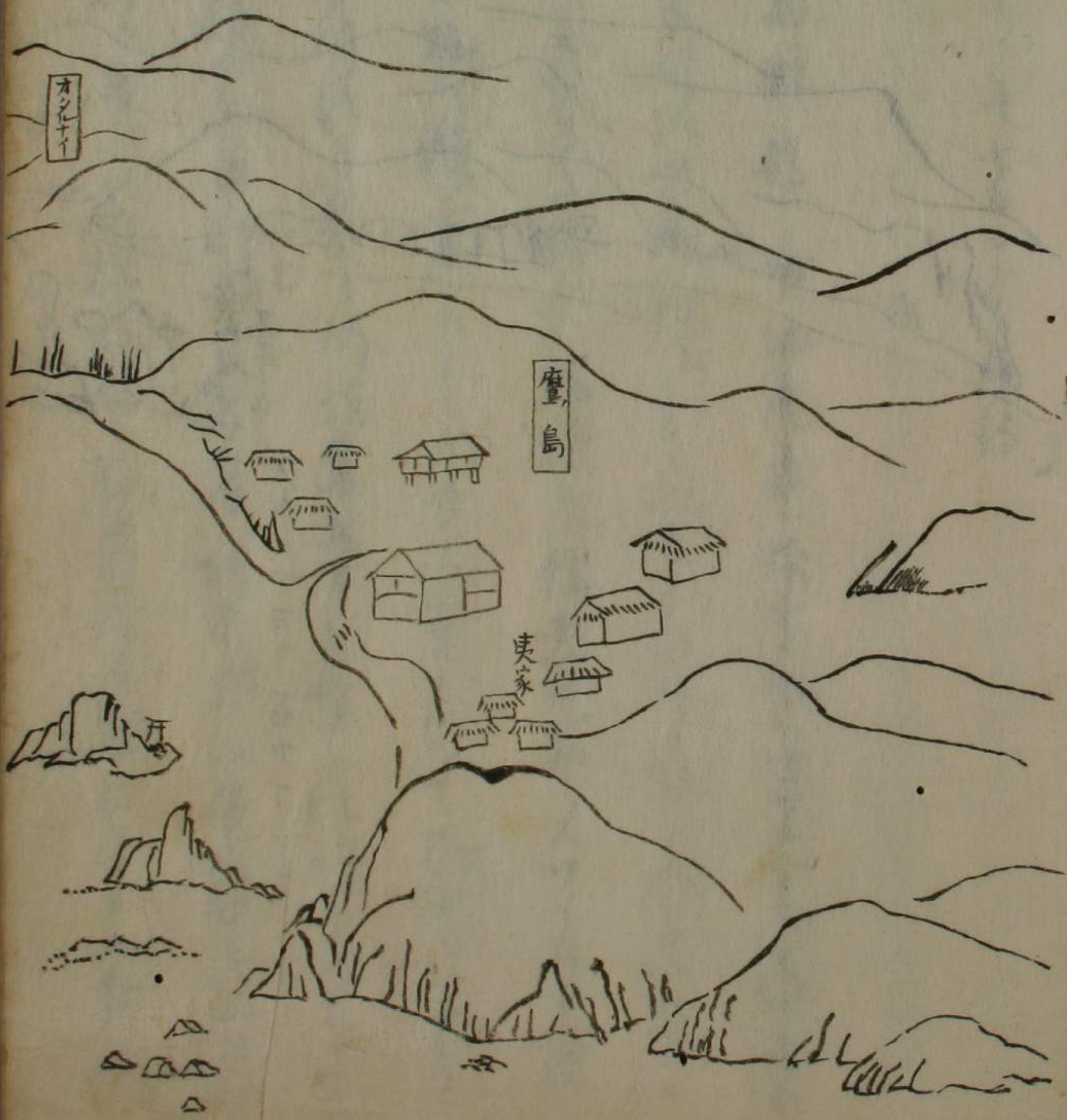
十二日より六世よりと海の溪一里まきしとてらつとて

少のぬぬくの具化しと石とあきる有故々のほしとて

せしとてり拾ひぬしとてりおのしとてしとて海の面より余

上りてんとてさうく早う船はさしる一面の平石あり又
 傍に二三園とありてこの本の数十丈ありてちかむてわら
 上りて

十二の卯申別家船東南の風とて午別はタカシマとて西へ
 舟のふい後口の山とてうけかへてふいなる傷ありて舟をりてよ
 く島中東南の方には東経のちをそふりりてさき世より周り
 二十からしりて三航の岩海中に独りて又水の海中に大
 やり差の双立せりふふい無文天を案し海原ふい石の
 石ありて是にて海色の船を航す





俗義經
馬石云

夕カシマヨリ石カリマキ
九九里

十四日より十七日まで風吹

此亦産物雜務 干海荒事恰多あり定て令九二〇三
 十八日眞吉別以吹風吹りしを船りひらりあつた言小聲
 これまなだれしをこい 瑞穂丸信孝丸印ニスワイ舟を般
 等少歩末路ひ程不走り一凡廿二里とほて風吹こり
 ねし一と未別以りる一仍信孝丸不長船れり舟のま
 出て二里餘の不申別あり一若存 坊毛ポ口泊運之船より不
 ちしと掛らるるを 梅敷字新中しりり表家十三戸人

より地味に松島の老屋下國豊前長原の町人住居地
りるより運河令も粒多ありより一着ぬハシカシテ小田
こそりより終り十二里計もありてハテシテと云ふ石の
方より西にけりより切きりりぬ山あり黄令山といふ夷人地と
夕ヨロシベといふ夷よりあり小着山の面より形ちりり
てイナホウと云ふ
イナホウ本ヲ備へて日かノケウリカケト云モク大十九巻モノ也
スシヤト云イナホハ稲穂ナルベシスシヤハヌサナルベシスベテ
神ヲ祭ルニ用ユサレハ日かノ古昔モ也ヤアリケシト
此山と別物地と云
義徑の古事とありより一ぬれと定り知れる夷人といシヤ
てあり イシヤマとい
ナシと云フ

十九日午の別氏立出で淡色とあり石の多くあり
し種海あり二里計よりしてテウケイといふ所より砂地あり
二里余よりしてルモツベの島の北に松島を以てして増
毛よりかきりるより一着ぬあり
サ日卯別氏ルモツベとあり砂とあり山たは海に北あり
概美地南水の海よりして向ふといふより一着ぬあり
之四里よりしてトイウツキと云ふあり海に臨み粒大の着居はさあり
と林より老ふぬれに北島小波打りけりて海を以て終りこれと
よりめと地よりしてなる小島は陰を以て海の高きハ川と云ふ

粒ぬけてをる——叔陽穂丸の沖をくせしてソウヤまをり
ぬれハ信存丸と某公の旨やと定め又は不しそスワイ奴女殿
と命して海客とせしめてこきつゝ孫より叔ハ海客と名を
叔ハ舟と名をりオニシカて舟をよそを籠と名をておはせり
舟のぬれと海客とを引舟とて申別トトマエと定め丸
十二里半のち海客なり——

廿一日卯辰刻トマエと出てハボロ川と舟を渡りツクビツ
とらしてシヨシヤニハツボありぬけおハトマエの海客船とて
少船を引りつと本陣と定め傍にありけり。是かといひの
かりををきつゝいなきらうとてはやくの船のほくれのくく
きのみカスべてる舟をを食しぬれとやうかハ腹を痛
めり者世にわんこ及つり仍時ハはやく舟をり
つきぬれとをりしゆり

廿二日卯辰刻トマエの晴とて舟に舟小舟ありてはり
やうれき人海客をりし丸六里半の舟人家を船と
やうしそ船後只種と波のめと友より或ハ是を伝ひ
りハ海客と踏みしるうしそ舟やうしウエベツとて
舟のぬれハ大やう川あり座席トて海客とて舟をりし

いふおとんと向ふとふれハかりヤ金取り大音と後

扇を揚て招きぬ色ハ内より若人夫人ホがらうと出

て船をかして源ハゆくと皇女度して又後色を

行ニ里斗して三三ウツとを申列氏テシホと云ぬ

皆ん若れハあくの翁をリわけたり若人少て少家と皇女一とに

体と一ぬぬ西帳表化ニハ翁を源とる瑞不奉てくくくくく

二月七月中盛曉の時と云うてニ百果トリハる也物始れ

サニ日邦別若事取して未列氏ハツカイベツと云ふと云ぬト云う旨

海くちト云う揚しと糧食ハ勿備瑞冬昭統ホ即ちと揚さ

若人ト云うと陪後せりけハハソウヤの揚揚して皇親皇親

と云うて悉くト云ふ本の皮りて送らるうり少金と云ぬ

未ソウヤト云う若人ト云ふ元より夫人の住居がハ平々和いそやく

若めれハ少家の目のほららハ中の左ハ姓名のひまて物と云

立揚年と云うと云れりぬ

くも又同ハ漢字と云うて本の丸唐と膝麻とを云う

此をハツカイハツと云ハツカイハ脊腹ト書倍ベツハ川之後口の方ハ

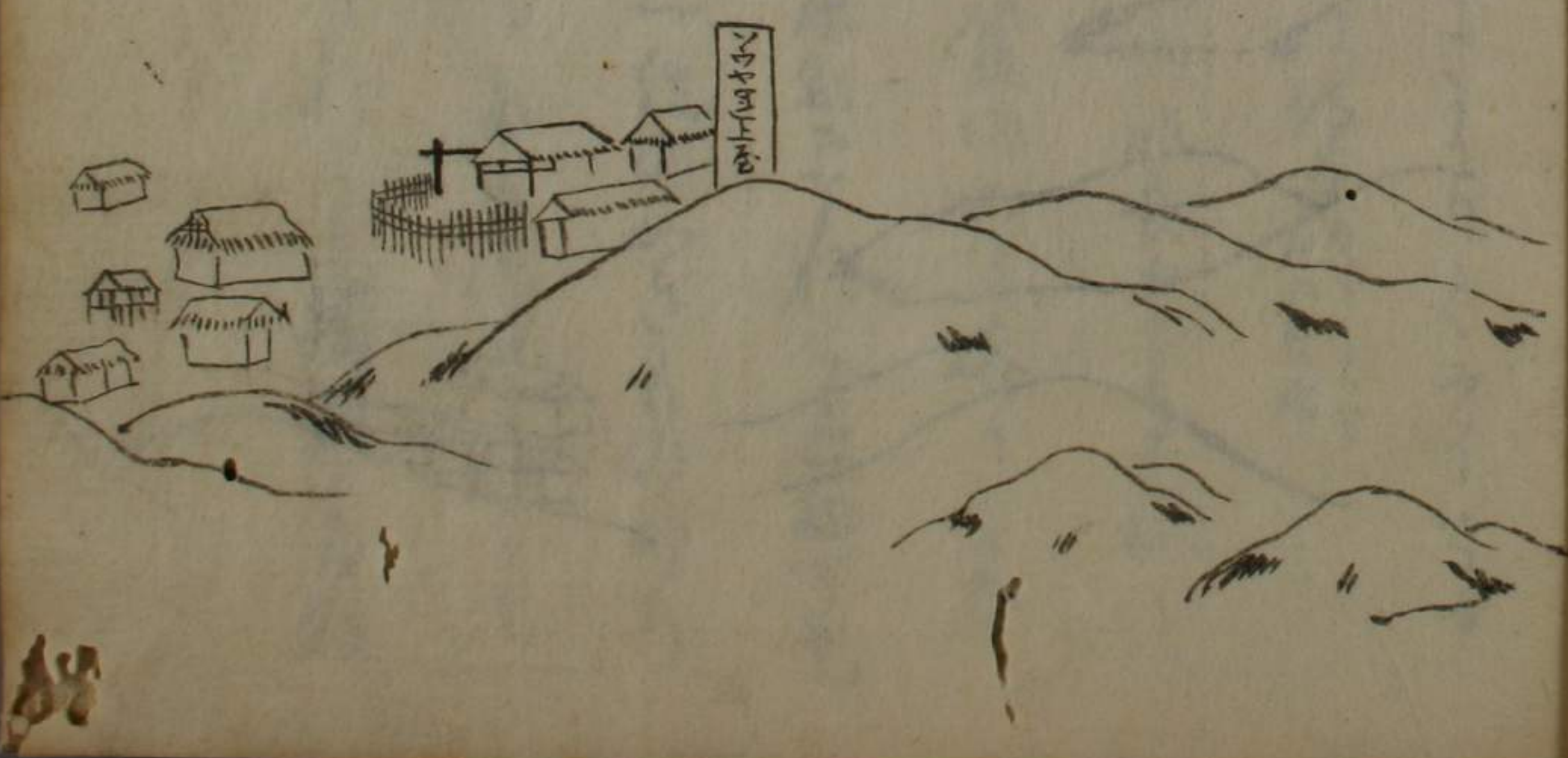
大なり思と厚と云ふわろ名らるト又けぬの目と云ハハ

とね奉今と書くと云れり

廿日自邦別氏事取若事列氏事合と云うけハハねあ事取と云



リイビラ



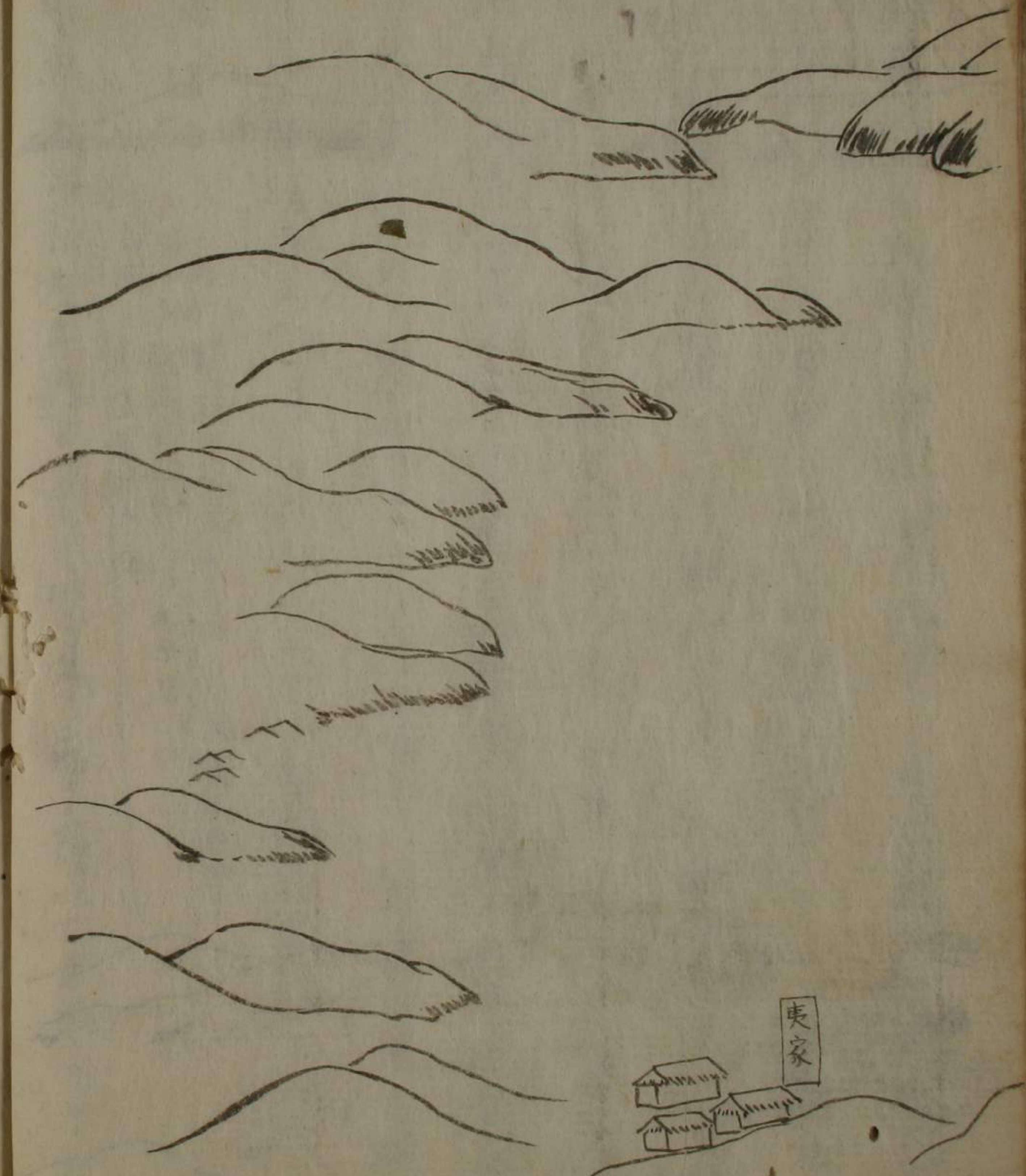
去年庵東庵西を治せりて世西丹の病を治りて身内くりりり墓

宗谷

南方去松前一百九十里
北方去唐太島

巡行寛政十年戊午七月 三橋藤右衛門

勅書の土も在塔一室を成し廣くして家敷七八軒美人中家
も金銀もくくく西角の海をうけて舟をうくく南よりイシリ
レブシリ ノツシマブの傍とんる船をくく又西角の方七八丁に於て
ヒリカタイてくあより唐太のシラヌシ小見ノト口等の山もある凡
海に十八里ありと云ふこと天女の社ある室曆十二年西宮船に
船の邊をく唐太と云ふもの事なりと云つて舟を治り
小のけをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくく

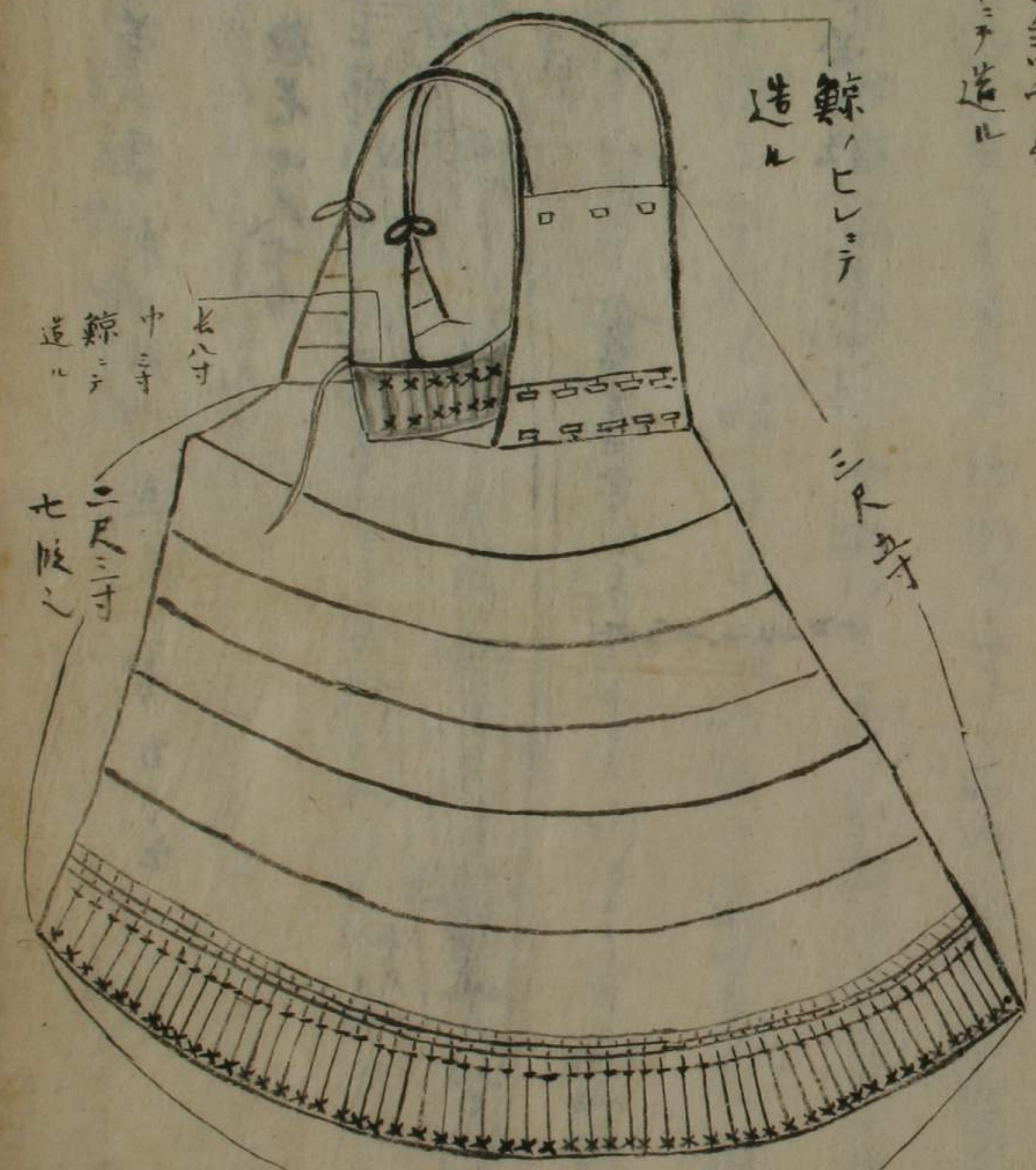


不もあり 公命ふまふりかゝる世にまうりくライセり
 りのりけれこそま子のふも思ひやれ侍る。

ライとい
死の考

サ又日六日多うりて侍るやうりくふ高木の長カシモエレ人
 ころよの蔵せり澄をみる想華をて義のめく造りて
 邦を赤城澄と云りの三回くく一藤制をれく古ぬて
 又小使シラク。トイと云者の蔵せり之法のめさりのあり
 夷人是をカと云たの肩を赤城やあまの中指を
 鼓を調子の年細くして強曲いおくれも彈曲の名較
 十なり此の八九を紀と

鏡
友人アヨツと云
趣華ニテ造ル

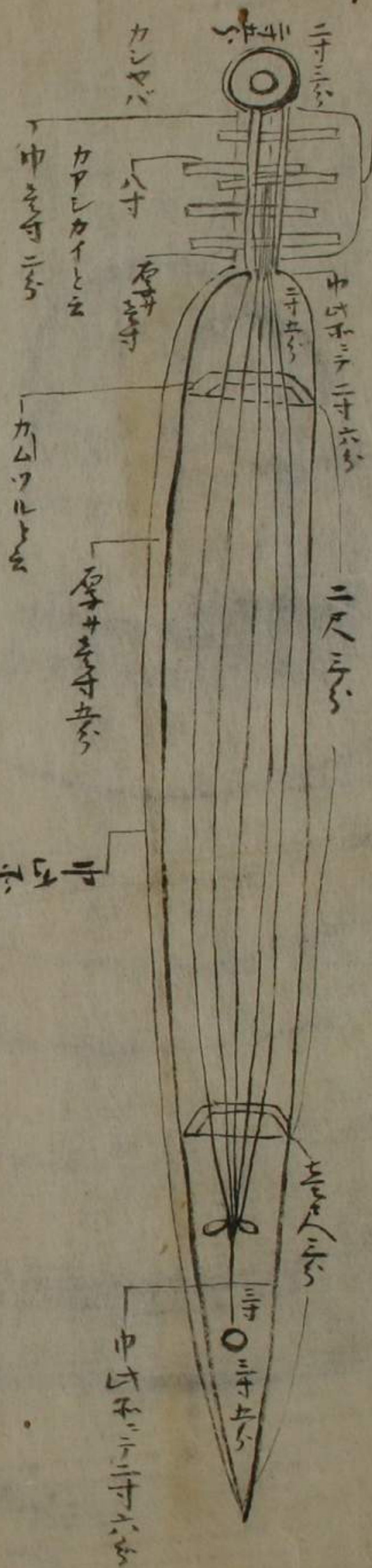


友人アヨツと云
趣華ニテ造ル

- 一 カモイアソベイ
かみきり
フシベイ
鯨とくじ
テイゲ
ハウエ
- 一 ベーツハツカ
河へまり水
モムハウエ
流るる
- 一 サシタ
山丹
メノコ
女人
童子
千シ
ヨウタ
フシゲ
ハウエ
- 一 シマノシ
熊
母子
へカキ
トウノ
シノ
千カル
ハウエ
- 一 ムニシケタキ
草中
虫の
ナキ
千キ
リ
ハウエ
- 一 パシクロ
鳥
イベアソベ
食むる
時
カバキリ
ウコイキ
ハウエ
- 一 レタキリ
白鳥
の
ハウエ
- 一 モシリカリ
清のちり
カモ井
ア
フカシ
ハウエ
- 一 イタンキ
振と笑ふ
と云を
イ
ド
ハウエ

五弦ノ草ノヨリ系ヲ用エ 夷人 是ヲカト云

(寸三分) 熱七四尺七分



委一ノ寸法ハ別紙ト

二寸三分

廿七日 山嶽と云凡 彦毎より 往く、かきそ ぬれ止と 踏入
 とまの ちりて 一 ちりて 絶なり 中々 二 ちりて の ぬれ 止 ぬれ 止
 一り 未 出 海 氷 舟 一 舟 通 行 せ 度 共 或 ハ レ ブ ン シ リ 等 一 氷
 と 踏 せ 渡 せ され ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止 氷 舟 一 舟 通 行 せ 度 共 或
 流 止 是 一 ちり ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止
 氷 舟 一 舟 通 行 せ 度 共 或 ハ レ ブ ン シ リ 等 一 氷
 て 舟 一 舟 通 行 せ 度 共 或 ハ レ ブ ン シ リ 等 一 氷
 渡 海 一 舟 通 行 せ 度 共 或 ハ レ ブ ン シ リ 等 一 氷
 廿八日 風 ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止 一 ちり ぬれ 止

廿九日 己卯辰より大坂のぬい家を出て浜のまち
たばこにて海中に雲出りの芝をツヤとらふツヤと蜂の巻
流を蜂の巻とらふ雲出りのまかくよりソラヤの名を以て記す
しきりして好御の東人の指付しおセキおらうて千セトへ
つふふよまぬぬとて意欲してぬけくぬけふよしとを
流を流しつるふらをして新ふ山をぬけつるふらあり
晦日卯亥刻に出でて好御毛より千セトをエと八日海内
たふ海内よ山とのこらふふらふたのちも廿九廿二日
大中流をきつるぬき七子よしとてぬけと万里をぬけとら

せぬふとわりのむらてふれむいぬぬは森くつるは林
しとぬくこくふらふ山とやうく只帳表松トと云ふ所のこ生流り
て岡壁以来想更の入しふらやうとぬけとらふゆお星けふ
しとサルブツよまぬぬらぬぬの浪也東人の指付ぬけ

六月朔日卯亥刻に出てお星けふしとつウベツとらふおま
夷家七戸ありて筒長とシリメキエとのふ家れたがせらる
四西池しとねハきふらふしと一方より梅のりてせりぬ
る指を根をもしとふらふらとてむらぬとらぬとらぬ
小古き具足二枚をぬい帳表制りしてあそぶしとら

華澄よりハヒリカニカリヒリカハ善シ一カリハ遠シ又鎌倉時代

の以器換瓶の古びたるもかゞ一モ介 タシ子ツブ大カの

且モシ経カの 瓶との宝器と藏せり ねふひの芳を採

ぎつらんより我師より酒をきびりれの耳盞本邦ノと

出してウの酒をうう一朱ぬりのトウキ強めとウガザラ強

小のセ太の酒を抄してイトトテ小汲入て先主人盃と瓦ハカ子童

としてはし一うを以て客をとと入客をとりてして

吾君著とんて諸神と手向而後二口小のみ流うて又酒とつ

しして主人の心をと主人を数と吾君の心の一かくの

如水瓶を一してあがるしと酒のありの際の春をとと人をま

枝老女の心をとちりるも甚疾めり此心とトウハ心と名つけ

るのハ心さらりるふ湖ありの流れを海入してかくまぬは

心をけちてシホナイと心ぬ凡千セトマ早うシヨナイまん十

心を里のる山あり林のことんる

二日知申別セウナイと心ぬかしりし山あり海入とあて林をと

り小森へト心老山流雲雲雲をり流をちんと心ぬ心ぬ心

りれハ心をととしてハ山を心ぬり林をとりて流をちり

或ハ山の心ぬをととしてハ林を心ぬり心ぬ心ぬ心入心

海のふらふらとあつたまゝのやうに世をカモ井ベロギといふ元
 淡祖の端なき里中へして 平たいウレナイ小島をよこして
 少ぬれ赤茶二里にやうして 千ヨニイとあふりあつて 平井
 小島ぬまゝと平列にたれとたれとあつたものたれとをあらぬ
 之日知事別以 丑サレとあつて 幸里中へたれとホロベツ小島を
 まくのらうと 淡輪場と見え 西平たいウレナイとて 幸南
 をきひまゝとあつて 赤茶二里のたれとあつた
 べてらうと 淡輪場と見え 赤茶二里のたれとあつた
 松ありとあつた 幸南



カモ井(ロキ)
ノボリトカリト云



昨日辰刻にホロイを出てあゝありのまゝにけしは波きりれは
上陸して未刻にサロキ小岩の

立日辰刻にサロキよりあゝありてあゝありのまゝにけしは波きりれは

浜し路の足のあゆみりする
岬のれいながきりけしは波きりれは

小岩のれいながきりけしは波きりれは

か通洞事人等もわりてあゝありのまゝにけしは波きりれは

くふろあつてひまのあゝありのまゝにけしは波きりれは

あゝありのまゝにけしは波きりれは

さて午セトニ上りてあゝありのまゝにけしは波きりれは

わしと妻人首長り家と印跡と定りしものあれは或ハ井

を煙 妻人常々弟のりのとアウハズ板とウケケども弟ヲカサズ茶

ノ煙をせウガチキキ中ノ水ヲ吐ルニハ粒附ヲ得ベシ 或ハセツヲカリシ

セツハ床シ妻家テ主人妻ノ病不ノ床ヲ作置汁余ハ皆去るニ後養

或ハバツタリキセとカリシ バツタリキセとハ多穂のり人妻也

改修ありハ股者言をそしち治し年月分修され

て妻人小舎しそびいけシメシキ 大ニ昔方 ありし

は雨とわりそがハ忘れりるらんしそとれ

六日 七日 八日 是雨ノ降るて其云のあつを待

はるりしりヤリのみとそとるよりまゝと海申お出ア

サフシトの敷を治時しそ悪風をそそクナシリ也と

酒流せり度とそ且ふおれハ水海とあるるしそ

とそれハあまの足水とそらられしそおれを細い

お殺りしりしそ又ま風お存の水のそそとめて浮

ひ出の海敷を梳とけ付ら水とそり或世のそそ

もあかりの終り所とそあつは紙しそおれ

ソ一業とそあつヤイカタノアソ

あつは紙しそ

事とそ人

九日卯別トコロと出て二里許ありてコムケツプと云ふ所をた
の方小コムケトウあり左溪を渡獵場としてカリ山を夷く山を
等より余程好てシユクノツナイと云湖をあるたふれを里
まゝありてく鴨をとりて二里許ありてユウベツ小島あり

十日卯別ユウベツと出て三里許ありてトクセイと云ふ所の溪
より右の方林中小入りり四六丁ありてサシルトウ有る南
らせりて左の六里余あり深山連なりて水ハ平林あり
鴨をとりてありは水あり國合取帳夷舟を並らバシリあり
魚一と並ぬまハカモ井トノ是より折るあり舟をりて水あり

人々を帳夷舟よりり余海客とてりおぬありの流
は海入ありとトウブツと名く夷舟十余あり梅ノミトウハ
塘ノブツハ
渡美語され湖口の
よりり三里余ありてトコロ小島あり是あり
夷人よりりりて住居一渡獵場ありてありありとありて建
築あり

十一日卯別トコロと出て二里許ありてノトコロありありて
ありて休ふはありりシヤリの花死ありり勤者の足程
住居ありあり出向ふは色のお押敷千本の麓山ありて切立
ありあり波の奇ありぬれありありありありありありあり

さうと云ふと一りゝ実不獲船の備ふと一書して汗をぬくよ
も理りてかひくれに船より帆走りぬるありて舟のれは船
まゝぬる波もよして魂を驚くとも一回一たびはサ
まを大里あんの幅之田ん中の舟がれは波の舟入るもやうぬ
あはれとすまひして
行ふ
シノウエシ
（まゝあんざん）
（シヤクマ）
（カレアシ）
（キンガエ）
子ナイ
テイ子リカカ
めれ
（あはれ）
まゝ船大の思独まゝ一或は双まゝ一やうくの形をぬく者
名あり 波ビレヨ。カビリレヨ。シノウエヨ。パイラ井ナ。おあり候
お波のぬるも又た

夏川の瀬の白糸なり一柱あびるよりの言葉ありん
かゝりてアバ〜と云ふ

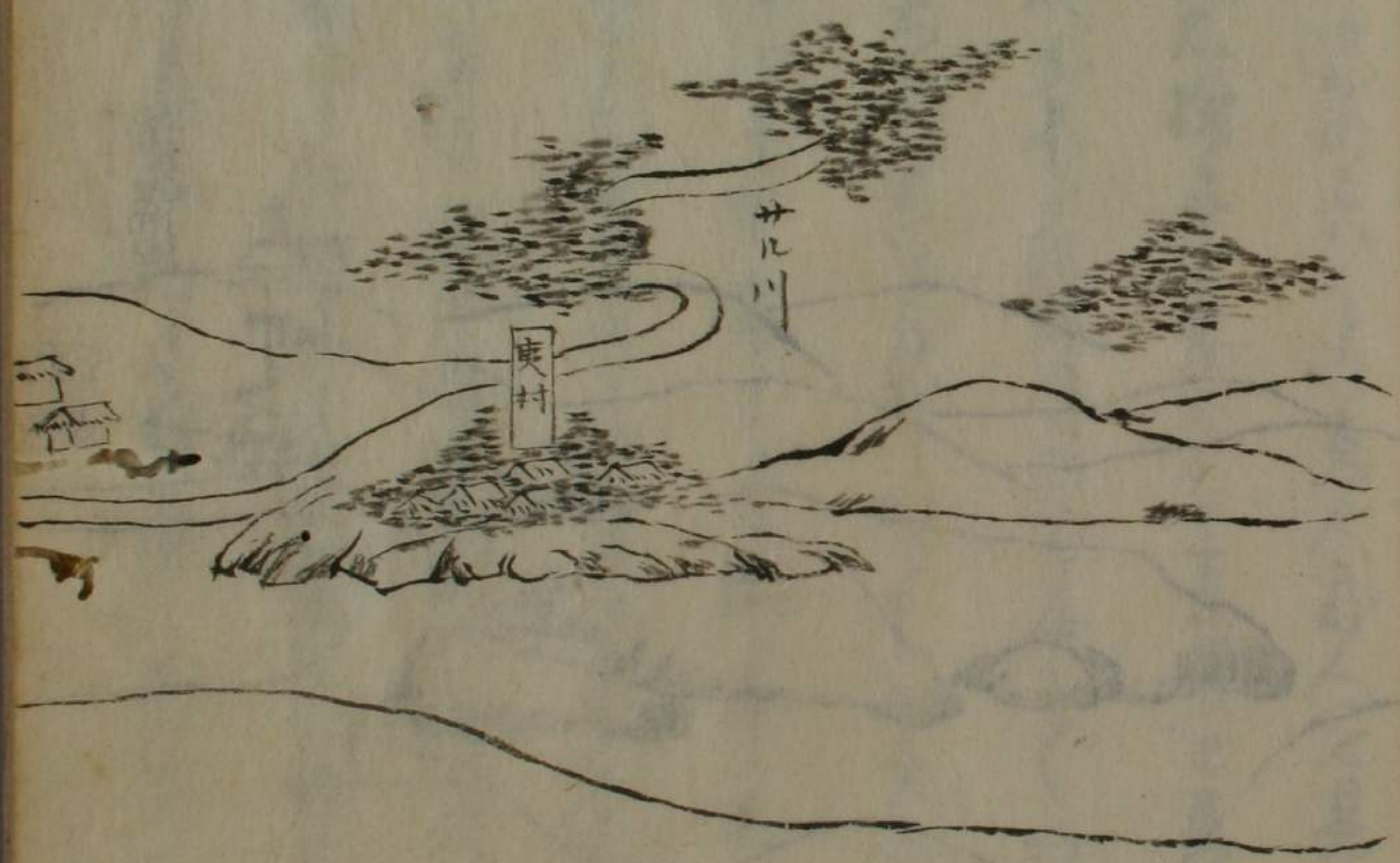
十二日卯刻と出て舟のあり出岬をさうな船大の差縁
舟の縁をさう形もいゝと面白く一又海中小橋右の形網
のうらふ船はれ アバ〜と云ふ アバ〜網の中ナ 名も是れ小記る

やう〜とソレト井てふはよして意納をさうしり船あ〜とヤリ
小舟ぬは色の淡ふは白くゆるるありありあつてるゝぬ
シヤリハ中海とさうけてサル川を帯ひ東西小舟村連りて銚船
おの糺業をやせり思ふをゆりて松若船も舟の士は船大死
人を河へおれりむも死場所も廣大なりと云ふ

十日卯辰の間にサリ川に舟を渡りてサリ川に
 舟の中流にありて九十里あるたは流林として牧乾後
 トンダベツクシと云ふ所に上陸せしむる新築の山を以て樹木
 生茂りて牧乾を以て今年五月千人既東集子のい
 さがしと云ふやまのぬに里中ありてサリ川と云ふ所の
 あり千人方より舟を去つていせりてのこしを去人の
 住居し居てか

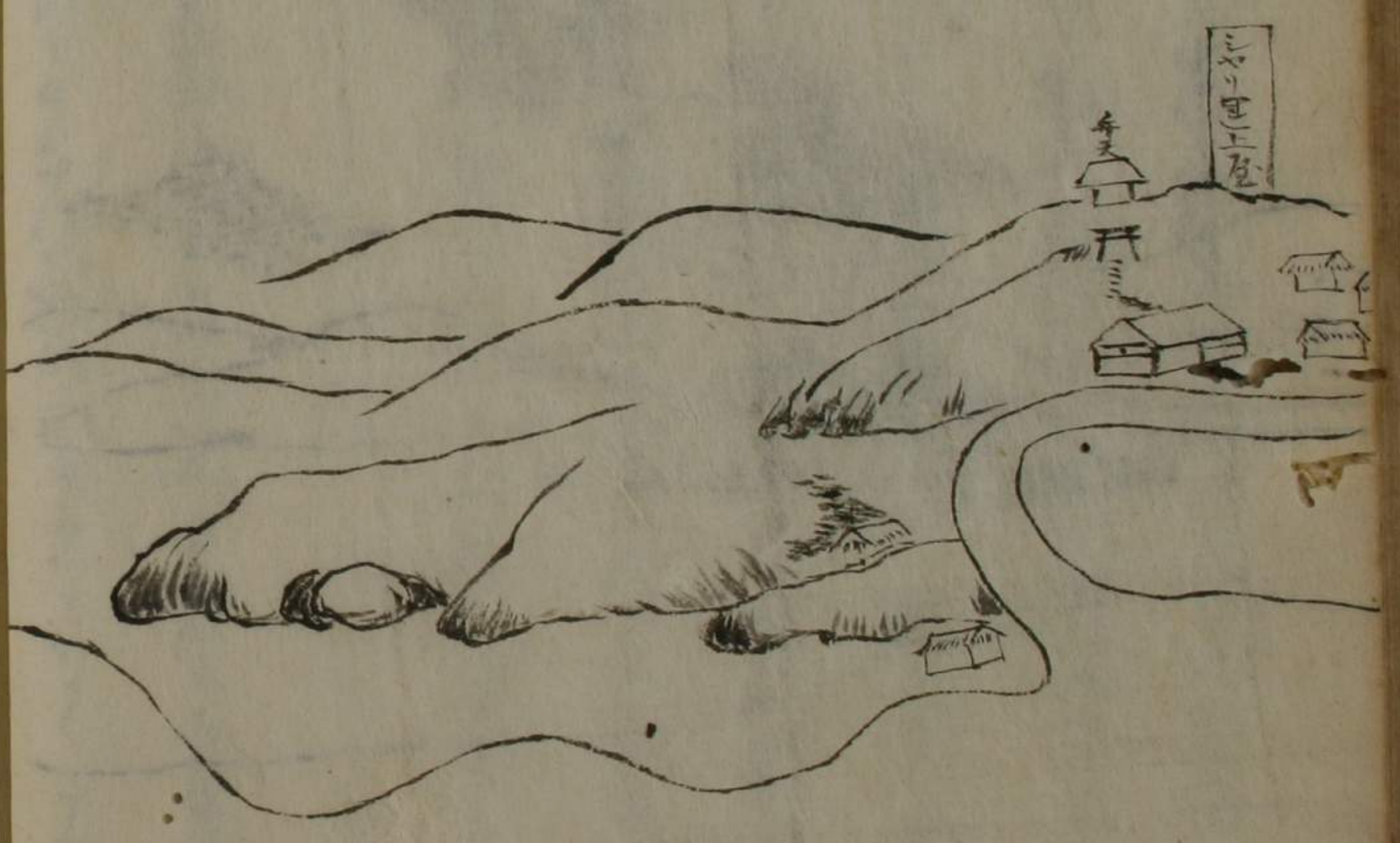
十日卯辰の間にサリ川に舟を渡りてサリ川に
 舟の中流にありて九十里あるたは流林として牧乾後
 トンダベツクシと云ふ所に上陸せしむる新築の山を以て樹木
 生茂りて牧乾を以て今年五月千人既東集子のい
 さがしと云ふやまのぬに里中ありてサリ川と云ふ所の
 あり千人方より舟を去つていせりてのこしを去人の
 住居し居てか

サリ川と云ふ所
 七里ありてトシ
 ガベツクシと云ふ所
 小玉七機夫舟
 も玉舟の介宗



庚村

サリ川



此所ヨリニトコ
の岬を深居
丸

山中とあはせしるがのこひより美人の心と果してこころく
 好みは細くたな樹木生茂りて方角を告びてとては
 おこひの心とよとあはれありこころゆりくわたりての枯枝をさ
 くら丸 獲るる大舟をさしゆくかたをさすわたりての葉を
 集めて松のやうき里余りて漸く深きあはれサレル川
 上一回サレル
ワカヤ井と云ふ事とて四里半の山をよそこのこけく
 りて移りてせりたりて坂十余たふありはた深げなれり
 本皮作りの飯舟のこけは色もろを津南地よありて
 舟をボシキ子川とあはれはたよあはれ一是よりニヒツとのなる

右の西別ノボリたし廣きとんぐ、或は林に入或は廣き
出たたな草のむき出てくるのふらも急なひらき
十き里まの山とわかきしと申別西別と云ぬ
十五日辰別まにびつと出て或は林中或は道を降り
午別とつらびにびつとやあむり急ぬ、夜ふらのぬえたの
やど、枕がとあし、世もハ前ノクスリ川をうけて、後ノ山林を
うへ、先のあさ飯をあらひ、まればなり

十六日卯別とあふあつて壺川とわらけ川に、びつとやあむり、廿里中
山奥ノ十里四方の湖ありて流れ出る、川中十の余、底深く
大いなるうめはありてやも、とれは、是うこち、あふとこのあふ
ゆり、とんぐ、とんぐ、某の、君の、後者の、系も、あふ、うりて
後、の、佩、を、沈、り、う、さ、ら、り、あ、れ、と、あ、れ、と、あ、ら、め、ん、う、り、又
た、た、樹、を、け、あ、ら、う、る、中、に、枯、木、の、枝、が、ハ、根、着、の、を、う、り、た、ら、ぬ
の、う、り、の、踏、み、ま、ら、り、風、情、あり、と、か、い、く、ら、ぬ

猿、さ、る、を、か、か、あ、ら、の、あ、ら、と、も、あ、ら、ぬ、ぬ、の、あ、ら、ゆ、り、ん
七八里、う、り、た、の、方、より、流れ、入、川、を、是、ト、フ、口、と、い、ふ、混、り、あ、る
し、又、あ、ら、ん、林、へ、つ、と、ま、も、流、入、る、と、い、て、十七里、中、に、う、り、と、ク、ス、リ
あ、ら、の、は、色、も、を、廣、き、う、り、あ、ら、ん、う、り、と、あ、ら、ぬ、入、け、川、と、い、

蝶紋と書きしるにシヤリガハ北東少島と曰ふ所は
凡そ千四百里の山乃く是より海迄は皆東嶺を以て
其嶺も多くと云ふもよくあつてひたりの結合は菊地の
某とてすべし

汲人ハ千と名の給近つて一と云ふ川をふちの流流

十七日知事別クスリとてテタノシヤリとて
口ベツと流りて白糖の島ぬたの海を東山とて
行つて七里余 ヲタニシテ ルハ善 ハ不ハ千人改系
某の坊場

十八日辰別流シラヌカとて流る所四里にありし

シヤクベツと名ぬ

十九日寅半別立出て二里計のたの島とて出で彼の
流く島せぬの付いぬり都一なる由は山中小島とて
かゝる所ニシテ亦とわりのくハ波もこの外は思ふ所を傳
ひて無りぬ 此島も南嶺家の坊場ぬたは嶺を以て
かゝりて高サ十四丈と幅四丈と云ふ所ありて
おしそみの島とてより師の云ふ島とて
昔は島を削りて都一ぬ又海の面ニ丁字の島を以て
そのあり形は定くせんが島を以て七人

わりぬくもも是れ人縁なりしにわらぬ物を眼をく
 らるに初そのもりねがはしと具なりぬトカカ川とて凡五六
 十らにやんとるものもあはれに後一物なくオホツナイコ
 初るに川にやあなるものも一源ハトカチといふ事を
 二流とせりしに川にも蝶紋と名をいひてオホツナイの
 當分のと表家もトカチの名に似るものぞと
 昨日卯申別出で漢邊をりたの方或は山或は沼をわり蚊帳
 多し一六里余してトウブイのむらて蚊多く合すのり蚊帳
 かくしては居し

(アイノコタン) (ホロノオカ井ハ) (アブチユツケ) (タイキ) (ウリキニ) (モウシ) (マハリン)
 (蝦夷の赤) (あやあつら) (た) (燈) (蠅) (蚊)

わりぬくものをも被りてかきこらるるものなり
 こころもあふあひて逃出するものなり
 廿一日 漢別とトウブイと出で初るを由り或は漢をわり漢
 流に石もくあはれ物さきし一は() のあふ切界なり山
 たりて美先と名のぬきスリりけりあふと凡五日後斗海意
 く波多く風あさ目もあふ人の波帯にオホツナイとあふ
 漢流もやとあふやえぬの類にありし

廿二日卯時刻 草花とて三里川にイビニイと云ふ
てんりい海を存してモ千クジニア船もろて波をりれるるる船
しりたふよりて 彩葉をりり カム井カルーと云ふより
浪ふと申す川に又少く入る十金アセル、のかりぬおどめ
廿二日卯時刻 出て四時丁に山あふ入サレ川あり浪舟二艘はが
さきよりすしと浪舟をりて舟はりぬ二里
汁し老うたの方を海に浪上りモ岬百人渡 百人渡と唱あがの裏ん
文章中の浪と云ふはシヤム
シヤムといふ長津州 の金延に産出するものと云ふことと書きたるは
追帳表にオシヤムと述べてしゆといふるはりしゆのうすうすへあり津州のあ
れ、命をわりしれども是と対せしめりて書きて百人と云ふは、か
のて味ちりしり百人といふと名つけしり

と眼よりんわりの一木の方と申すは、おろしりす 峯巖を
しりたり又がしりしり、さすしりなるは、月の乃浪秋森は、
さすりしりなるは、くさきしりなるは、しりしりしりしり
かしりぬ

杉森の味とてしりしり人の袖の跡れきやさしりしり

六甲事業の山をとおしりしりしりしりしりしりしりしり

廿二日卯時刻 出て三里川に浪舟をりてホロミンベツと申すは、
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり
少をわりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

ゆらゆら女ありかゝる人備後下る所ある海にりりある地也
ゆらゆら己等ハ此月（此月）の某館（館）より見えていふふと

ついでに実世のこゝろを知らぬ一太の女を物取と称す

玉織りといふく大なる石つわり干瀬の対に中をなる端
瀬の対にかくしてとらして高サ丈余中層までこの「瀨」と並て

付あまをくくくおりの俗名をブウヤシエマと云実ハフヤオマレ

シエマと云ふゆゑなり
フヤオマレのゆゑオマレと入るゆゑシエマと云ふゆゑ 祀りく
これハ元ありていりる石と云ふゆゑなり

シヤマニ小名ぬ世にハ山の出岬としてたふ海をうけて数々の船を

いづれハ山の方ありて秋の山登と云りり五段のまうすありハ

世にハ店なり又儀々遠海場水車ホウツといふなり御舟を

大根凡ホの作ありてガ一筋の凡化及ぬゆゑのゆゑ

と云ふぬ

廿六日在別江邊馬荷と出て十余丁ありて左の方ハ

少少を立寄るくねく流石なりいづれハ流石焼業か

どいふんすなり一責人ハ一箱ひきもつてふふなり

此化の石本ヤリと云ヤホロツと云ふ再して流石ニ寄す中

ありてウラカハムタナと云ふの石本ありぬ

武川の舟渡しを説きユウブツの事あり

七月朔日 卯刻と云ふて此の事あり

此色の草樹とて此の事あり

此の事あり

此の事あり

申刻と白老の事あり

此の事あり

二日卯刻と云て此の事あり

七日卯刻と云て此の事あり

三日卯刻と云て此の事あり

此の事あり

四日卯刻

五日卯刻と云て此の事あり

此の事あり

六日卯刻と云て此の事あり

此の事あり

七日卯刻と云て此の事あり

從四月廿二日至七月廿九日有五日海

陸凡三百九十八里
錄

△箱館

船岡村

世呂地

元

箱館分館

○七重村

元

箱館分館

△大井村

元

辰五
年

三花
百
江

辰五
年

仁八
長
物

辰五
年

辰五
年

一渡村

元

端中村

元

世昌力ヤ入 活方居小沼

大北の田

○スクモツへ

三三

臨中台所近山中是海濱

才三ノ子イ村

元

名主

年寄

七年

名主

年寄

撤洞村

元

大野分九リ本

△砂束村

元

産物 鯛 鮒 鱈 力スへ

サクウノ海是七リ

△以友

會所諸合

支配人

長家元七八戸

名主

年寄

海濱

名主

年寄

長清新

長
改
小使

五十七分新屋山及三里拾三丁

○ 統制

高尾アリ

黄家凡六戸

△ 赤口川 魚渡

五十七分

△ 田衣別

金家凡拾六戸

文記
傳

黄家凡拾六戸

長 トレシカ
小根 イカシ
小 丑人アリ
長ク池サス

産物

鯉 昆布 カスヘ

・ ウンボツケ山物

○ 藍路 高尾アリ

高尾凡六戸

シキ工川

西渡

志喜屋

凡二十戸

此辺土地耕作可宜

シラウイ川 西渡

ホロハツをとり幸 物産

△白丸

會和港合

支配人

吉家凡十戸

長

近原八

小根

シヤタイ

凡二十戸

シラウイ川

○小島

五人家

浦原

ココ井

五人家

浦原

へうらつ川

こらうオイの九リ

△ 雨武津

会所 法合

西渡

河海法物
東 新物
河内豊神
皇居之儀
支配(其)集

善家の凡七戸

根出

小

世男キムントヲアリ 田廻凡之屋集ユラフツ川也

トク

善屋アリ

シコツの世所道経道送ユラフツ川也
いふの及耳業多し

△ ロウサシ

会所

支配人

善家の凡七戸

牛

小根虫



ロウサンニ隣ニ早クシユウ

シユウ

會家

支那人

吉原凡十二戸

小根長

世不名石精造川ぬちりシユウ川よ云ぬぬハバソホリ
の精シユウトヲ合流し出ルニ重汁ナリトオサツトウニ重汁也

凡西重汁

オサツ

吉原凡

ロウサンニ凡三リ

イハツ

吉原凡

イ子ヤツフ

吉原凡

小流合一入

シマツフ

吉原凡

小流合一入



吉原ユウハリ川流ノ世邊ニ凡西重汁上ニユウハリアリ

ツイシカリ

有るアリ

イハチブト

有るアリ

世所なる石橋川にシエツ川合流して有る也

トマシイ

有るアリ

トヘツ子

有るアリ 三田戸

子ヨナイ

有るアリ 三田戸

イケツトシカ

三田戸

シヤツポロ

三田戸

トユビラ

三田戸

サツボロ川 小流也

ハツシヤブ

三田戸

フレコヘツ

三田戸

トヤレ

三田戸

シフクシ

三田戸

イシカリ

四流アリ

中流各

マクレベツ

二戸

トクヒラ

二戸

シコツカ石持道川中凡古田西里石十八番川の石持道川
石持道

シコツカ石持道

△石持

石持道

石持道

世所南極地なる松島へ行く

イシカリが八なり海とナリ

△石持道

石持道

石持道

石持道

長 モシカク
後 モシキトシ
小 ナアサカワ

三戸

三戸 鶴津地 海鼠

道上人全凡三百人

アフタ

ハニシケ

此名貴人令山云アリ又夕ヨロシヘトテ

名産のちアリ

別物

夕カニシケ海と云アリ

△増毛

ホロトニリト云撮る

海と云アリ

名取元世

名取人

名取

名取十二三

長イハイワクル

銀 アリシマ

小 イカイカアインサクレテ

産物

鯨 鰯 海鼠 鮭 鰯

カスヘ

地取 中国名産 刺 法 魚

海産物

ハニベツ

二二二

ホントナリ
ニ戸

シホレハツ
ニ戸

シユアレハツ

シヤクソ
ニ戸

ヘフサ川

アツ
中巻アリ

中巻アリ

△クシテシナ
マシケタニリ
中巻アリ

シユシユ子
中巻アリ

ニウケイ
中巻アリ

中巻アリ

先より砂地

マシケタニリ

ルモツヤ
中巻アリ

一
二
三
四
五

一
二
三
四
五

カシ敷十のち
黄の丸のち

小孩
コタレビロ

屋敷てしけニ回

エシルーカ
七六戸

トニリテナシヤ

オソシヤ

オニイシハツ

オセト
ニ三戸

トニツコ

△オニシカ

黄の丸
黄の丸

法
梅
黄の丸
黄の丸

下
下
下

へコタ門

西海

△トて立

ルモツヤカキナリ

道の上

掛り

清負

林名

支那

孫名

地政松前能西脚

産物増長一回

吉原

長
ルケ
イヨクテイ

根
クニカイ

小
ヒトクタ
ケイホコ

紫がやあゝ方海津ニ居アリテヨロヤンケシリト云
紐跡の六ヶ辺より海舟一々極すもよし也

トマリアサ

ハホロ川

五段

世辺砂倉アルヨシニ三國通貨を足すれども名あり

○ツクビツ

ケリヤ屋ニあり

トて立分ルハリ

△セヨシヤンベリ

島屋

夷島

アールベツ

○ウエハツ

島

ワフベツ
エルマウツ

島屋

セヨシヤンベリ

△ニテシホ

島屋

島屋

海軍省の通川を以て丁

島屋

産物

△サル

オフイニヤヤ

手塚分館

△ハヤカイベツ

借少

小娘長
アハセカシ
ハソカシ
イタゴフシ

生洲方家各史記

ルイラシ

ツカフカルシ

シテトシリ

ウアサシ泊

トフベナイ

クサシド

ナイホイ

クサホヘツ

リヤコタシ

シツシヤツノ山

ハツアニハツケルナリ

△ 深谷

深谷山ノ山

松尾勲

青島園
並河家守

支那
糸巻

糸巻十巻

長
オタトモク
小
カシモ早レ
シタラドサ

産物

海産 常物

中洲の南の方海中にワイシリシテシシリとある。

ヒリカタイ

中洲の産物たるもの

オシコロソナイ

凡中戸

オシモイト

凡中戸

オキ子ホソナイ

凡中戸

トシリケン

凡中戸

クシカタイ

凡中戸

中洲海中に産物あり
リヤト

シロ

十

○太モヤシヤツ

島屋アリ

千トセテへ

十

△オシヤフニ

ソウヤシヤリ余

島屋アリ

へ千ヨヨベツ

千ヒトモユク九六

△サルフツ

山入フシリ丁者あり七名ラ宅あり

水

サルツツク九六

○トウヘツ

右側アリサニテ渡り山入一三軍一者あり七名ラ宅あり
宅九八名屋ありアシク千三

名ハ
モリキエ

将
テクバア

水あり

トク
△トクホナイ

トクホナイ

トクホナイ

トクホナイ

●カモ井(口)

一云ノホソトカソ

トクホナイ

ベクイウシナイ

ケヨニイ

二戸

△トクホナイ

十二戸

トクホナイ

トクホナイ

トクホナイ

金持ツ

金持ツ

ヘトフシヤツ

ヘトフシヤツ

フシナイボ

フシナイボ

○ヘラフイウシナイ

ヘラフイウシナイ

ニウシトセリ

ニウシトセリ

ソウシツア

ソウシツア

オチシベツ

オチシベツ

△ホロナイ

ホロナイ

早サシタナリ

川アリ

乙名

ナシトミ

乙名 小眼

ヤイカレ
コアルカレ

乙名

アルタレ

氷アリ

オムウ

三戸

△オムウベツ

夕ツブシベツ

二戸

シケトナイ

三戸

ホロナイ分元六リ年

△サワキ

十戸

氷アリ

△オケシベツ

オカツベ

子戸

ル子

三戸

七名 小根 廿ヶ元アマ

○廿ル
六七戸

△オレカリシヤツ

ワコワ
ニエ戸

セウコウ
湖濱ノミチルヘシ

△モレベツトアリ

サツラガハセ七軍年

中島アリ

檜ノ
深井ノミチルヘシ

張合豆煙

西洞

浪音集

依子集

夷人経居ノ通凡チ下アリ

小須長

カンベウカ
アノシケシ
シヤヒミヤ

音物

鯨アサラシ
アツシ

モレベツ

廿七戸

西原ノ中ノ十戸

△ヒミヤナイ

△ヤシユレベツ

○コムケツプ

長
ウエシカタ

ヤ昌トウアリ申三回下ニ一里子集の長
又ハ
其の所ハ
皆コムケツ

シクフツナイ

申九ニ

△エウベツ

川中凡

モシハツカ

申九

其の所

長カシ

トイトク

ニ

トクセイ

ニ

世所
トウアリ申三回下ニ一里子集の長
又ハ
其の所ハ
皆コムケツ

トウフツ

十

ユウツ

△トコロ

其の所

其の所

世帯通うお谷お記をいふこやりの記

小張長

カトモシユラ
夕々アレル
イナシレニカ

○ノト口

十二三ノ

二ノ中ノ事お記あり川中流り中島あり

淡合足燈

依反上お記

●世帯通うお記あり

ホヒシヨ

オヒリシヨ

けいじいお記ニテお
世帯通うお記

シシナイコタン

エロク

ハイラ丹ケ

エロク

△アハシリ

トコロタハリ

世帯通うお記

世帯通うお記

トウニヨル

オヒヤウ

イシヤニウ

ヘキ子ハキ

ナヨロ

九三戸

○フレト井

アハシリ分五戸

中島分アリ

ラレベツ

八九戸

△ミヤリ

アハシリ分九戸

中島分アリ

高島分三三戸

小根長

レウケウアイ
ケ子フチヤンケ

勤音

高島分三三戸
高島分三三戸

文苑人

百五

長

エウタラレケ

オコトヲツ

シヤル川セリ
○トシタベツク

トシタベツクを好む

△サレルフト

一日シヤクレビラ

借水あり

世間をシヤル川に流し、其後、若くはトシタベツクをシハツク
ヤ道、好む者、子ハ、人、方、と、建、造、す

シヤリハナケ

サレルフトを回り

サレル川と

一日サレルワカツカヨ

世間を流す地

サレル川と

ホシケ子川

ホシケ子川を好む

△ニシハツ

酒別を好む

△ニシハツ子ヤ

小猿

イタツ子
キノコロ

山崎のくさりの川の水と云ふ

白ツキイ

凡七八リ

○トウロ

湖アリテ其流合流ス

△クスリ

會所アリ

山崎のくさり

沼合

沼地惣内
武井の沼

支配人

柏石アリ

産物

昆布 カスベ 蝶鮫

賣家凡部有

小根長

夕日ヤニ
ハキリニ
アイコヤ
アヤガ

○ヨタシ

△五口

*

コヤトサ

サシユセ

二三度

△白糖

クスリノセリヤナ

金所アリ

喜歌凡ナ

長合

京本

同

長

コタカ
子ヤラ

小孩

スカヤレクル
サシブツカ

子ヤルベツ
シヤクベツ

合流

△シヤクベツ

シラスカ

葛屋アリ

葛屋

長合

長合

長

コタカ

短

イッレモシラ

小

ヌカニ住ス

アウナイ

此邊の南の山に於て

コソフカリウシ

三戸

△オホツナイ

シヤクハツクセリ

中野ノアリ

此洲の川原ハトカキタル多流ノ凡口等ノ下流
此川ニモ標ノアリ

青森ナレトカキタル標ノアリ

小脇 七名

トモクシテ

シヤニゲレテ

キヤウフニシ

ユウトウシ

ノル記リ

○ユウトウシ

オウカケイ

オウカヤニ

通

シロサイネホリミヤ
トウフイ

島田アリ

故多〜〜〜

今ツナイ

多

豊井

フツベツ

△ 美光

トウフイホセリ

金新アリ

浪合 田口久

支孔

島田アリ

島田アリ

小根 乙名

シイベニセイ

ツツヤルベツ

のルへしベツ

カニ井カニ

ヒロコニリキ下新の

△サニ

強者新アリ

○揃中法

サニハホロイツミコ新及シ安キハ長有
とツミコハ長有ハアリ長有ハ長有

△母衣家

サニハ長有ハ長有

會所アリ

一日アツコ

法會

信友家
信友家

長有

お配

長有

小長

ハ
ワキマツテ
ガルモク
ドワイクシテ

○ホロコシツ

法會

オトブニ

ホロコシツハ長有ハ長有

フワヤシユ

長有アリ揚ニフヤ
ツミコハ長有

ヤウキル

オウイツミモセリハ

△ 速馬荷

會所アリ

張合 和國名

支那人

世前日カク山の口鐵多クあり
又備わぬ事一海を隔たり

イクモレベツ

六七戸

ホロベツ

めら

海

シシ

△ 浦川ムクベツ

會所アリ

張合

支那人

オウイツミモセリハ

小張長

ウムシラシケ

且サアイン

シツトシ

ヤイ子リ

キルラ

唐物

イカメ

五

○カワ

五

△カワ

五

△トシ

五

△トシ

余

比企市

比企市

比企市

ベニトシ

△トシ

五

比企市

トシ

トシ

トシ

五

シラカ

△子カワフ

川アツク

川アツク

淡合
お記

お記

お記

小編

うルカセ

ヤイモシ



お記

お記

△マツベツ

お記

△サルモシベツ

お記

淡合

お記

お記

お記

此處遊釣及水邊

合儿川 水邊

此處遊釣及水邊

合儿川 水邊

合儿川 水邊



合儿川

合儿川

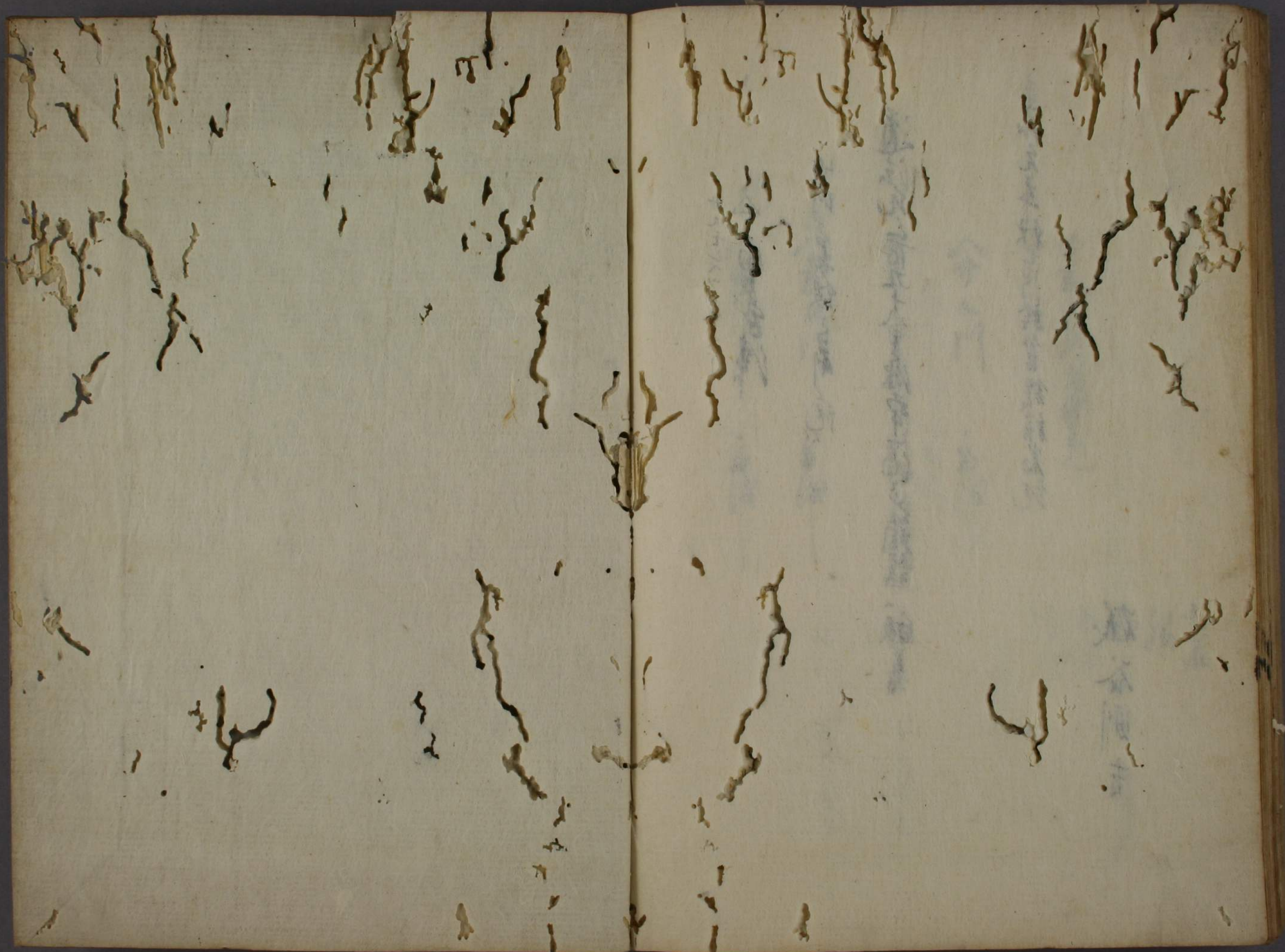
此處遊釣及水邊

道法元之百九十八里橋中一泊之相館之飯者

此處遊釣及水邊

儀谷剛吉

小瓶



Fragmentary text in a cursive script, likely Arabic or Persian, appearing on the left page. The text is mostly obscured by dark, irregular stains and holes, particularly along the central gutter and the right edge.

Fragmentary text in a cursive script, likely Arabic or Persian, appearing on the right page. The text is mostly obscured by dark, irregular stains and holes, particularly along the central gutter and the right edge. Faint blue ink markings are visible on the right page.

